†光闇の絆†

竜華 魁羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†光闇の絆†

【Ｎコード】
Ｎ５５２１Ｊ

【作者名】
竜華　魁羅

【あらすじ】
記憶を失くした青年が、様々な出来事に巻き込まれながら、自分の記憶を取り戻し、成長していく過程を描く。
途中で出会う仲間との友情、信頼、裏切りの渦巻くファンタジーファイアーエムブレムを基盤に描くオリジナルストーリーです。
カップリングに、ＢＬを含みます。

†序章　眠りの王子†（前書き）

ここはクルーシュという名の、緑豊かな小さな村。

緑が青々と多い茂り、小鳥のさえずりが聞こえてくる。

森にはたくさんの動物達もいて、小さいながらも賑わっている。

村に住む男達は、毎日、森や近くに流れる川へ狩りや仕事に行き、女達は家事や子育てに…と、ごくごく普通で、それでいて、幸せな日々を送っていた。

そんなある日、村に住むジョセフという男性が、村の外れにある森へ、いつもの様に
狩りに出かけ、傷だらけで倒れている少年を見つけ、助けたことからこの物語は始まる…

†序章　眠りの王子†

～町外れにある森にて～

ガサガサ…

ちょこんと座り、背伸びしながら、耳をピンッと立てて辺りをキョロキョロ見渡すミミウサギ。

それを見つけたジョセフは、ミミウサギに気付かれない様に、茂みをうまく利用しながらそっと近付き、弓を構える。

次の瞬間、素早い動きで狙いを定め、矢を放つ。

ジョセフが放った矢は、見事、ミミウサギの胴体を貫き、絶命させる。

「よし！」

一声、歓声を上げ、弓を収め、仕留めたミミウサギを回収しようと近付く。すると、その後ろにぐったりと倒れている青年を見つける。

「おい小僧！大丈夫か！？」

声をかけながら青年に駆け寄り、軽く身体を揺する様にしながら抱き起こし、再び声をかけると

「おい！しっかりしろ！！」

「…う…」

青年はうっすらと目を開け、身じろきするが、また気を失ってしまう。

「！…仕方ない」

放って置く訳にもいかず、ジョセフは青年を担ぎ上げ、ミミウサギを回収し、村へと急ぐ。

村に着き、自分の家に入りながら

「おいエミリー！ちょっと手を貸してくれ！」

その声に、怪訝そうな顔したエミリーが部屋の置くから出てくる。

「どうしたのさ、帰ってくるなり大声出し…！」

と、言い終わる前に傷だらけの青年を担いでるのに気付いて

「ど、どうしだんだい、その子！？」

「森で見つけた。だいぶ弱ってる様だったから、放っておけんでな…」

部屋の置くにあるベットに青年を寝かせながら

「村長に話してくる。小僧の手当てしてやってくれ」

「わかったよ。あ、今日の獲物はなんだい？」

「ミミウサギだ。丸々太ってるから、食い応えありそうだ♪」

フフン、と鼻をならし獲物を自慢げに見せ、台所に行き

「ここに置いとくぞ。…行って来る」

ジョセフは村長…こと、マードックの家へ向かう。

エミリーは旦那を見送り、青年の手当てを始める。

「さて、まずは頭の傷から…」

手際よく、傷薬を頭の傷に塗っていく。幸い、深い傷はない様で、少し安心する。

ちょっと解説

この世界には、医者と呼ばれる人がいません。…そのかわり、シスター（修道女）やプリースト（神父）、ビショップ（司祭）というクラスの人達がいて、魔法の杖を使って治療します。
…そのため、各村や町、国には必ず修道院か教会、神殿があり、無償で人々の生活を助けています。
傷薬や特効薬、毒消しなんかもあって、一般では薬を使う事の方が多いです。
クラスについては後ほど、解説します。ではでは、本編をお楽しみください～

一方、ジョセフはマードックの家に着き、ドアをノックする。

「村長、ご在宅か？」

ジョセフの声に気付いて、マードックが出て来る。

「ジョセフか？…どうした？」

「森で傷だらけで倒れてた小僧を見つけたんだ」

「で？その小僧とやらはどうしたんだ？」

「放って置く訳にもいかんだろ？連れて帰って今、エミリーに手当てさせている」

「では、傷が回復したら話を聞かせてもらおう。それまで預かってもらってもいいだろうか？」

「ワシは構わんが、エミリーにも聞いてみる。…まぁ、反対はしないと思うが」

「では、頼む」

「あぁ。用はそれだけだから」

ジョセフはマードックに別れを告げ、家へ戻る。

～ジョセフ宅にて～

「…ふぅ、これでよし」

青年の手当てを終えたエミリーは、台所に向かい

「晩御飯の用意をしようかね♪」

そう、鼻歌交じりにジョセフが狩ってきた獲物を調理し始める。

～数分後～

「ただいま」

ドアを開ける音と共に、ジョセフが帰ってくる。

「お帰り。村長さんはなんて？」

「しばらく預かってくれと頼まれたんだが…」

「あたしも構わないよ。…どうせ、もう了解済みなんでしょう？」

クスクスと笑いながらジョセフを見る

「まぁ…な」

その笑顔に、少し苦笑しながら

「で、小僧の具合はどうなんだ？」

「手当てしたら、少し顔色良くなったよ。そう、酷い傷もなかったし、大丈夫だよ」

「そうか、良かった」

一安心して、ジョセフは微笑みを浮かべる。青年の様子を見ようと、ベットの方を向いたその時

「…ん…？…あ…れ…？…」

少しだけ起き上がり、ぼ～っと、辺りを見渡す青年に気付く

「気が付いたか？小僧」

「あら？もう大丈夫なのかい？」

†眠りの王子†～続き～

「…だい…じょうぶです…」

少しだけ、ひりひりするような痛みはあるけれど、我慢出来ないほどではないので、青年はそう答える

「そうかい？…遠慮はいらないから、辛くなったらお言いよ？」

「…有難うございます…。…あの、ここはどこですか？」

「ここはワシの家だ。こっちは、嫁」

「…ワシさん、ですか？」

青年の言葉に2人してコケ、少し呆れながら

「ワ、ワシはジョセフだ。…面白い小僧だな」

「あたしはエミリーだよ」

「えっと、ジョセフさんとエミリーさんですね」

「そうそう。ウチのひとが森で傷だらけのお前さんを見つけて、担いできたんだよ」

そう言って、笑顔を向ける

「助けて戴いたんですね…有難うございます」

青年はペコリと、頭を下げながら言う

「…そうだ小僧、名前はなんと言う？」

「え…っと、僕は…っ！」

答えようとした瞬間、頭に激痛が走る

「どうした！？」

「大丈夫かい！？」

突然蹲ってしまった青年に二人は驚きながらも、心配げに駆け寄る

「…いた…、うぅ…」

「痛むのかい？無理はしなくて良いんだよ？」

エミリーの言葉に、青年は少し首を振り

「…思い…出せない…」

「な…！」

「…僕の…名…っう！」

考えようと、思い出そうとすればする程、頭にかなりの激痛が走る

「ま、まさか、記憶が…？」

「…何でもいい。何か思い出せないか？」

ジョセフの言葉に少しでも答えようと、痛みを我慢しながら思い出そうとすると…

『…ル…シ…』

「…ル…シ…？」

「ルシ？」

「…はい。…そんな感じの名で呼ばれていた気がします…」

「う～ん、ルシ、ねぇ…」

「…安易で悪いが…、ルーシー、でいいか？」

「はい？」

「小僧の呼び名だよ」

「あ…はい」

「では改めて、ルーシー、今は無理をするな。…少しずつ思い出していけばいい」

そう言ってジョセフは優しく微笑み、スッ…と離れて

「エミリー」

「はいはい、ご飯の用意してくるから後は頼んだよ」

にっこり笑顔で言い、晩御飯の用意の続きを再開するため、台所へ向かう

「…すみません、ご迷惑かけて…」

少し頭痛が治まり、申し訳なさそうに言うルーシーの頭をジョセフは撫でてやりながら

「気にするな。…今は傷を治すことだけ考えればいい」

「…ありがとうございます…」

ジョセフの台詞に、笑顔を向ける…と、後ろからエミリーの声

「お待たせ、ご飯の用意が出来たよ♪」

料理をテーブルに運びながら二人を呼ぶ

「旨そうだな♪」

席に着き、楽しそうに言うジョセフに、笑みを返しながら、

「ルーシーも早くおいで」

「あ、はい」

ベットから降り、ジョセフの隣の席に座る

「たくさんあるから、いっぱい食べてちょうだいな」

にっこり笑顔で、自分も席に着くと、いただきます、と食事を始める

「…いただきます」

両手をそろえて言うルシェルに、どうぞと返すエミリー

その言葉に食べ始めるルシェル

†眠りの王子†～続き2～

「…美味しい」

「旨い♪やはりミミウサギはコレで食うのが1番だな♪」

そう言いながら料理にがっつく二人

「ほらほら、そんなに慌てて食べなくても…」

言い終わる前に、

「んぐっ！…み、水…っ」

肉を喉に詰まらせるジョセフに慌ててエミリーが席を立ち、水を汲みに行く。ルーシーは少しでも苦しさを和らげられるようにと、ジョセフの背中をさすりながら、

「だ、大丈夫ですか？」

心配そうな顔を向ける

「はい、水！」

水を汲んで戻ってきたエミリーからコップを受け取り、それを一気に飲み干すジョセフ

「ふぅ～、助かった…」

苦笑しながら軽く深呼吸するジョセフに、

「慌てて食べるからよ。まだまだあるから、今度は落ち着いて食べなよ？」

「あ、あぁ」

苦笑し、背中を擦ってくれたルシェルに礼を言い、食事を済ませる

「ご馳走さん」

「ご馳走様でした。とても美味しかったです」

「そうかい、気に入ってくれたなら、良かったよ」

満面の笑みで言うルシェルに笑顔を返しながら言うエミリー

一息ついて

「さて、腹もいっぱいになったし、そろそろ行こうか」

「はい？」

「村長さんの所だよ」

「あ、はい」

「あ、着替えてからお行き。用意するから」

と、エミリーは着替えを探す為、部屋の隅にある箪笥を探し始める

「ワシの狩人服、大してサイズ変わらんと思うが」

「これなんかよさそうじゃないかい？」

動きやすそうな麻のシャツと、黒皮のズボンを取り出しながら言う

「着てごらん？」

「あ、はい」

エミリーから受け取り、背を向け、着替え始める。…と、その時、何かが落ちる音が聞こえ足元を見ると、

ごろごろと、綺麗な水色の石が転がっているのを見つける

「…なんだろう、これ…」

石を拾い上げ見ると、中央になにか模様が入ってるのに気がつく

「見せてみろ」

「…はい」

ジョセフに石を渡し、着替えを再開する

「これは…（紋章？…しかも、没落したルクス王国の…？）」

「あの…？」

「あ、いや…、これは、お前が持っていろ。何か思い出す鍵になるかも知れない」

「あ、…はい」

ジョセフから石を返して貰い、石を見ていると、

「これに包んで、大事に取っておきなさいな」

綺麗な浅黄色のハンカチを差し出すエミリーに笑顔で受け取り、それで包んでズボンに付いていたポケットに仕舞う

「服、少し大きかったようだが、良さそうだな」

「うんうん、よく似合ってるよ」

「あぁ、そうだ、この靴、小僧にやろう」

茶色の丈夫そうなショートブーツを渡す

「あ、有難うございます！」

お礼を言いながら受け取り、早速履いてみるとぴったりで、履き心地もよくよほど嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべる

「…小僧はいい表情をするなぁ」

「そ、そうですか？」

「ふふ、いい笑顔だよ」

その言葉に少し照れ、顔を紅く染めながら

「あ、有難うございますっ」

そんなルーシーを可愛い…とか思ってしまったジョセフは軽く咳払いし、

「用意出来たなら、そろそろ行こう」

「はい！」

「いってらっしゃい」

エミリーに見送られ、行って来ますと返し村長の家へ向かう

†眠りの王子†～続き3～

「待っていたぞ。さぁ、中へ…」

マードックはジョセフ達二人を家へ招き入れ、ソファを指しながら

「…お茶を用意しよう。そこにかけたまえ」

「はい。…失礼します」

二人並んで座る。村長は台所に行き、お茶のセットを持って来て向かい側のソファに座る

「私はこの村の村長でマードックという。まずは名前を聞こうかな？」

二人に紅茶を差し出しながら聞く

「…僕は…」

答える事が出来ずに俯く

「…実はこの小僧、記憶を失っているようでな」

俯いてしまったルーシーにジョセフが助け船を出す

「…記憶がない？」

「…はい」

俯いたまま答える

「…辛うじて覚えていた言葉から、ワシらはルーシーと呼ぶ事にしたんだが…」

「…そうか」

「…はい」

俯いたままうなだれる

「何か手掛かりになりそうな物はないのか？」

ジョセフ、腕を組んで

「ない事はないんだが…」

「どうした？」

「ルーシー、あの石を…」

「あ、…はい」

ジョセフに促され、浅黄色の包みを広げ、石を見せる

「こ、これは…！」

石に刻まれた模様（紋章）を見て驚く

「な、何か知ってるんですか！？」

マードック、少し間を置いて石の模様を見ながら

「…この模様はある国の紋章と同じだ」

「…その国とは？」

「…ルクス王国。…先日、没落した国だ」

「な…っ！？」

ルーシーは驚いて言葉を失う

「…やはり、ルクス王国のか…」

少し俯きながら、ジョセフが呟く

「（しかも…間違いでなければその石は、天の宝珠……いや…まさか…？）」

マードックは記憶を辿ろうとするが、確証はなく口を閉ざし思案する

「…記憶がないのはその戦の時の混乱のせいなのだろうか？」

ポツリと、ジョセフが言った言葉にジョセフは一旦思案を止め、

「…間違いないと見ていいだろう。…しかし、今は傷を癒す事だけに専念してこの村で様子を見ながら休むといい」

「…有り難う御座います」

ルシェルは力なく答え、頷く

～村長の家からの帰り道～

「…何はともあれ手掛かりが掴めた。…辛いだろうが希望は捨てるな」

「…はい」

家に着いて

「帰ったぞ」

「お帰り」

「…ただいまです」

心配させまいと無理に笑顔を作り

「…今日はこのまま休んでもいいですか？」

「構わないよ。こっちでおやすみ」

ベッドにルーシーを連れて行く

「…ありがとうございます。おやすみなさい…」

ルーシーは眠りつく。エミリー、それを確認して

「…何かあったの？」

ジョセフに小声で聞く

「…実はな…」

マードックから聞いた話をエミリーに話す

「…それじゃあこのコは…」

「…ワシらはワシらで出来る事をしよう」

「…そうだね」

「それで…だ」

ジョセフは何かを思い付いたような顔をする

「何だい？」

「明日、ルーシーを一緒に狩りに連れて行こうかと思っている。気

分転換にもなるだろ？」

「そうだねぇ、いい考えだと思うよ」

笑顔を浮かべながら言うエミリー

「今日は早めに、明日に備えて寝るか？」

「そうだね」

†1章　純心な少女†

～翌朝、村外れの森にて～

ジョセフは軽く伸びをしながら、笑顔で

「今日もいい天気だな。雲一つない」

「…そうですね。晴天って感じですね」

ジョセフの後をついて行きながら、空を見上げ、眩しそうに手を額に宛て、微笑む

「（少し元気出たようだな…）」

心で呟き、少し安心して

「さて、狩りを始めようか」

「…はい」

ルーシーはジョセフから貰った弓を軽く構える

ジョセフは少し離れた場所にある林檎の木の下に移動して

「まず試しにあの上の木の林檎を射落とせるかやってみてくれないか？」

冗談半分で、自分のかなり上にあった林檎を指射す

「…やってみます」

精神統一して矢を射る。一撃で林檎のヘタを射落とす

ジョセフは落ちてきたその林檎を驚きながらもキャッチする

「！！！」

その腕前に絶句する。射たルーシー自身も驚き

「…自分でも驚きました」

苦笑いしながら林檎をジョセフから受け取る

「…小僧はもしかしたらスナイパーだったのかも知れんな」

「…スナイパー？」

「弓兵の上級職だ（…それも、凄腕の…隊長クラス…）」

「…僕が…？」

「…それほどの力を持ってるんだ。ほぼ間違いないと思う」

そう、笑顔で返したその時！

「キャアァァ！」

少女の悲鳴が森に響く。その声に驚きながら

「なんだ！？」

「こっちから聞こえました！」

叫ぶと同時にルーシーは声が聞こえた方へ走る

「（速い…！）」

ジョセフも少し遅れながらもルーシーの後を追う

「あ……ああ…」

大きな木を背に後退りするようにしてへたり込んでいる少女。一体の強暴なウルフが今にも襲い掛かろうとしていた！

「グァルルァッ！」

「させるか！！」

素早く弓を構え、矢を番えて弓を弾きウルフを射る

「ギャン！？」

鋭い矢がウルフの首に突き刺さり、ウルフは絶命する

「…！…」

目の前で起こった衝撃に、あまりの恐怖に少女はガタガタと震え怯える

「…大丈夫かい？」

ルーシーは怖がらせないようにゆっくり近付き、ウルフを自分の身体で少女の目に触れないようにしながら手を指しのべる

「…あ…はい…あ…っ」

手を取り立ち上がるが、足に力が入らずルーシーに倒れかかる。ルーシー、少女を支えながら

「…歩くのは無理そうだね」

弓を肩にかけ、ひょいっと少女をお姫様抱っこする

「家まで送るよ」

と、笑顔を向ける

「…あ、ありがとうございます…」

と、少女は顔を少し赤く染めながら言うと、後ろから声がかかる

「ルーシー！大丈夫か！？」

ジョセフの声に気付いて振り向き

「大丈夫ですよ」

「あ、ジョセフさん…」

「ラッフィだったのか。怪我は？」

「…この方に助けて戴いたので、ありません」

笑顔を向けるラッフィに安堵し、

「…そうか、よかった」

ホッ、と息を吐くジョセフ

「…あの…、ルーシーさま…」

「呼び捨てでいいよ？」

「お…、降ろして下さい…」

「家に着いたらね」

「え…あ…」

顔を真っ赤に染める

「無理に歩くな。ルーシーに大人しく抱かれていろ」

ニヤリと人の悪い笑みを浮かべて言う

「じ、ジョセフさんっ！？」

「ん？どうかしたかい？」

ルーシーはよくわかってない（笑）

「…小僧は少々鈍いの…か？」

ルーシーに聞こえないようにボソッと呟く

「何か言いました？」

「な、何でもないっ（…聞こえてたのか）」

聞こえてないと思ったので、少々焦る

「早く行きましょう。家はどっちですか？」

「こ、こっちだ。ワシが先導しよう。付いて来い」

少し動揺しながら修道院への道を案内する。途中、モンスターに警戒しながら慎重に進み、急ぐ

†純真な少女†～続き2～

「？…修道院？」

「そうだ」

「私はシスターとしてここ住んでいます」

修道院の扉を開け、中に入るとそれなりに広く、とても明るい。天井近くにある七色のステンドグラスから、太陽の傾きにあわせて光を取り入れやすい造りになっているようだ

「…あちらへお願いします」

奥に見える扉を指す

「わかったよ」

部屋に入ると、ソファと大きな棚があり、中に杖が並んでいるのが見える

「あれは…？」

ラッフィをソファに降ろしながら聞く

「傷を癒す回復の杖や毒などの治療の杖ですよ。どうかしました？」

「いや、…どこかで見覚えが…」

うっすらと記憶の一部が蘇る

「…ちょっと杖を借りていいかい？」

「あ、はい、どうぞ」

ラッフィの許可を得て、棚から一本の杖を取り出す

「何か思い出したのか？」

「…見ていて下さい」

緑色の水晶玉が付いた杖を軽く掲げ、振る

「…リライブ」

ラッフィの身体を癒しの光が包み込み、傷を癒す

「…え！？」

「なんと！？」

二人ともかなり驚く

「…やっぱり使えた」

「…貴方は一体…？」

「回復の杖まで使えるのか…」

「（…この方はまさか…？）」

「他に怪我はないかい？」

「え、あ、はいっ」

ラッフィ、何かに気付き、少し反応が遅れ、慌てる

「どうかしたか？」

「い、いいえ何でもありません」

焦りながら答える

「そう？」

ラッフィの言葉を信じ、深くは聞かないルーシー

ラッフィはルーシー達に椅子に座るように手で促しながら

「お、お茶をお持ちしますから、待っていて下さいね」

そそくさとお茶の用意をしに台所へ行く

「ありがとう」

二人とも椅子に座り

「ラッフィの入れてくれる紅茶は旨い」

「そうなんですか、とても楽しみです」

暫く二人で雑談していると

「紅茶の用意が出来ました。お待たせしてごめんなさい」

ラッフィはティーセットを持って戻って来る

「凄くいい香りだね…」

紅茶の甘い香りに少し癒される

「さ、どうぞ」

ティーカップに紅茶を注ぎ入れ、カップを二人に差し出す

「いただきます」

紅茶を飲むと、口の中にほんのりと甘さが広がり、疲労回復効果をもたらす

「…美味しい」

「今日のはまた、旨いな」

「ありがとうございます」

数時間が過ぎ、外が暗くなり始める

「さて、そろそろ帰ろうか」

「そうですね」

二人共、席から立つ。ラッフィ、お辞儀しながら

「今日は本当にありがとうございました」

「何かあったらいつでも助けるよ」

笑顔を向け、無邪気に言う。その笑顔に頬を赤く染めながら

「…あ、ありがとうございます…っ」

「…若いな」

後ろで二人のやり取りを見ながらニヤリと笑いボソッと呟く

「それじゃ、また来るね」

「…はい」

ラッフィは赤くなったまま俯くようにして答える

「お邪魔しました」

「お気をつけて、お帰り下さいね」

「あぁ、ラッフィもな」

笑顔で交わし、家へ帰る二人をラッフィは姿が見えなくなるまで手を振り見送る

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5521j/

†光闇の絆†

2011年10月4日22時47分発行